小さな想い

亜季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小さな想い

【Ｎコード】
Ｎ６０８５Ｎ

【作者名】
亜季

【あらすじ】
剣道が大好きな少年、速人。剣道の強豪が集まる海明大付属中で日々稽古に励んでいたが、崩壊寸前の家庭の事情で、母が勝手に引っ越しを決めてしまう。
そんな田舎での速人の成長を描く物語り。

新しい町で

「ほ～ら佑介、景色キレイでしょ。」
「本当だ！！すごくキレイ！！兄ちゃんも見てごらんよ」

佑介に言われて速人も車の外を見た。

真っ青な空。
地面いっぱいの緑。
それを切断するかのように一直線にのびる道路。
遠くには、古ぼけた校舎が2つと、今にも崩れてしまいそうなお寺が1つ。後は、民家がいくつかある。それ以外はなにもない。
今まで暮らしてきた街とは、全く正反対だ。

速人は、そんな景色を鋭い目つきで睨んでいた。

「…速人、佑介、ごめんね。母さんが勝手に引っ越しを決めてしまって…」

2人の視線は、母へとうつった。

「仕方なかったの。あなた達をきちんと育てるために…」

母の目から、涙が溢れていた。

「母さん…」
佑介が思わずつぶやいた。

速人は、そんな母を黙って見つめていた。

「お願いだから…あなた達は、父さんみたいにはならないで…お願いだから…」

涙で前方が霞んでいたが、母は必死にハンドルを握った。

まだ3年生の佑介は、母親のそんな姿にショックを隠しきれない様子だ。

速人は、竹刀袋をギュッと握り、切れそうな程強く唇をかんだ。

そして、

弱っている母を切り裂く様な目でにらみつけていた。

引っ越し

「ばあちゃ～ん！！じいちゃ～ん！！」

ボロボロの家の前で佑介が叫ぶと、中から祖母が顔をだした。

「あらまあ、よく来たね～。いらっしゃい。」

そう言って優しく微笑んだ。

「おじいさん！！皆が来ましたよ」

祖母が叫ぶと、ドタバタと音をたてて祖父がでてきた。

「みんな、よく来たな一！！疲れただろう。入りなさい。」

笑顔でそう言うと、すぐ門を開けた。

荷物を運び終えると、速人は自分の部屋のベッドに倒れこんだ。

これからは、今までと違う場所で、今までと違う人達と、今までと違う生活を送らなければならない。

そう考えると、物思いにふけってしまう。

すると、ノックの音がして、佑介が入ってきた。

「兄ちゃん、母さんが荷物運び手伝えって。」
それを聞いて、速人は溜め息をつきながらベッドから起き上がった。
「あっ、待って！！兄ちゃん！！」
佑介に引き止められて、速人は振り返った。
佑介が、じっと竹刀袋を見つめていた。
「竹刀なら貸さねえぞ」
そう言われた佑介は悲しそうな顔をした。
「お願い、兄ちゃん。1度だけ振らせて！！」
と懇願してきた。
速人は佑介をじっと見つめた。
「わかった、一度だけだぞ。」
と言ってにこっと笑った。
佑介は嬉しそうにはね上がった。
「うわあ、竹刀って思ったより重たいんだね。」
そう言いながら必死に素振りをする佑介の目は輝いていた。
佑介は大きな声で「めん！めん！」と叫んで、満足そうに笑みを浮かべた。

ガチャッ
「何をしてるの…？」
ドアの方を振り返ると、母が立っていた。
「佑介、竹刀を置きなさい。」
佑介は、静かに怒る母の顔を唖然と見ている。
「置きなさい！」
低いトーンで怒鳴るように言われて、佑介はハッとして竹刀を置いた。
「母さん、なんで怒るんだよ？佑介がやりたいならいいじゃねえか。」
速人が冷たく言った。
すると、溜め息まじりに母が言った。
「速人、あなたの父親がどんな人だったのか思い出して。」
「父さんは関係ないだろ。」
「あるわ！」
母が強い口調で言った。
「あの人は、剣道を利用して沢山の人を傷つけたのよ！あなた達に

は、そうなってほしくないの！お願い、速人！あなたも早く剣道をやめて…お願いだから。」

母は、泣きそうにうるんだ瞳を速人にむけた。

「…でかけてくる。」

「速人っ！」

「俺は、剣道続けるから。」

速人は竹刀だけを握りしめて早足に家を出た。

「速人っ！待って速人っ！」

母の声が虚しく響いていた。

仲間

むしゃくしゃする気持ちをかきけすように、速人は走っていた。きづけば、よくわからない古い神社についていた。

静かな神社の中で、速人は時が止まったかのように呆然と立ったままだった。

しかしそのうち、さっきの母への苛立ちがよみがえってきて、速人は顔を歪めた。

そしてまた、そんな気持ちを追い払うように一心不乱に素振りをし始めた。

ブォンッブォンッ

静かな神社に、速人の竹刀の音だけがやけに大きく響いていた。

「お前！もしかして、来栖速人か！？」

ふりむくと、速人と同じくらいの年の男の子が買い物袋をぶらさげてたっていた。目を見開いて、こちらを凝視している。

「そうだけど」

目が合うと、少年は目尻を下げて大きく笑ってみせた。

「本当か！？スッゲー！雪子からきいとっけど、まさか本当だったとは！」

「何が？」

「お前、全国ベスト８の海明大付属中の先鋒はってた来栖じゃろ！？紀南中にそいつが来るってきいて、俺はもう…！何て言うか…！すげーと思って！」

「ああ…」

「あの海明で、しかも１年の時によくレギュラーとれたな！それも先鋒！」

「うん…」

速人は、こんなにも騒がしい人間に初めて出会ったのでうろたえた。そして、少年がだまった瞬間にやっと自分の口を開いた。

「お前の名前は？」

「あ？ああ、名乗っとらんかったか！すまんすまん！俺は一之瀬空。一応、剣道部やっとる。」

そう言ってニカッと笑った。

「こんな田舎でも部活とかあるんだ。」

「あるぞー！俺の父ちゃんが道場開いてるからなっ」

「へえ、お前ん家道場なんだ。」

剣道の話ばかりしていると、はやく胴着を着て、竹刀を握りたくなってくる。速人は提案した。

「なあ、今からお前ん家で勝負しようぜ。三本勝負！」

「今から～！？」

空は、速人のいきなりすぎる提案に、一瞬困った表情をみせた。が、にやりと笑った。

「おう！うけてたつ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6085n/

小さな想い

2010年10月9日19時22分発行